イエスの最初の弟子アンデレ

マタイによる福音書　４：１２－２３

ヨハネによる福音書　１：３５－４２

司祭　ヨハネ 井田　泉

顕現後第 3 主日

2026 年 1 月 25 日

京都聖三一教会にて

今日は福音書に語られているイエスの弟子アンデレのことをお話ししたいのですが、その前に一言だけ、旧約聖書日課のアモス書の言葉に触れておきたいと思います。

「イスラエルの人々よ、主がお前たちに告げられた言葉を聞け。――わたしがエジプトの地から導き上った、全部族に対して――

地上の全部族の中からわたしが選んだのは、お前たちだけだ。それゆえ、わたしはお前たちを、すべての罪のゆえに罰する。」

3:1-3

遠い昔、イエスの時代よりもさらに700年以上も前に、預言者アモスが神の言葉としてイスラエルの人々に訴えたものです。

神はイスラエルを選んだ。だからイスラエルをいつでも肯定するとは言われない。その反対に**「わたしが選んだ。それゆえ、わたしはお前たちを、すべての罪のゆえに罰する」**と言われたのです。

はるかに昔、神はアブラハムとその子孫を選んでご自分の民とされました。そこには目的がありました。神の祝福を全人類、全世界に広げるという目的です。そのための器、その目的実現のための道具がイスラエルです。それは、イスラエルが神から託された正義と公平と真実を行うことを通して実現していくものです（創世記 18:18-19、エレミヤ書 4:2)。それが正義、公平、真実とは反対の不義、不正、虐(しいた)げ、殺害を行うのであれば、イ

スラエルは自分に与えられたはずの神の祝福を台無しにするだけではなく、世界に対する神の祝福も破壊することになる。アモスはイスラエルの罪を責めて、神の罰を宣言したのでした。

ところで現代のイスラエル国家は、聖書に語られた神の民イスラエルを継承するものとは言えません。パレスチナの人々の土地を奪い、人々の生活を奪い、命を奪い続ける。しかもそれを正当化するために聖書の言葉を使う。そのような国家が「イスラエル」の名前を使うこと自体が、名の詐称、名前の強奪です。「すべての罪のゆえに罰する」。アモスの告げた神の審判の宣言が、今、聞こえるようです。

さて今日の福音書です。

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。」マタイ 4:18-19

ここにイエスの願いがあります。神の国を実現するために――この世界に愛と平和と正義を実現するために――わたしと歩みを共にしてほしい。あなたがたにしてもらいたいことがある。わたしについて来なさい。イエスの招きに動かされて二人はイエスに従いました。

今日は、シモン・ペテロの兄弟アンデレのほうに目をとめることにしましょう。マタイ福音書では、イエスはシモンとアンデレを同時に招かれたことが書かれているのですが、ヨハネ福音書を見ると、別の話が記されています。

ヨハネ福音書によれば、アンデレは元々洗礼者ヨハネの弟子でした。ある日、アンデレがもう一人の弟子と一緒に洗礼者ヨハネのところにいたとき、ヨハネがイエスを見て**「見よ、神の小羊だ」**と言いました（1:36)。それに突き動かされるように、アンデレはもう一人の弟子と共にイエスについて行きました。イエスは振り返って、自分についてくる二人を見て、**「何を求めているのか」**と尋ねられました。アンデレが真剣に何かを求めているのをイエスは感じとられたのです。

イエスに近づこうとするとき、イエスは振り返ってわたしたちに尋ねられます。「何を求めているのか」。わたしたちは何を求めているのでしょうか。一番深いところでのわたしの願いは何でしょうか。

ふと思い出します。もう 50 年も前、わたしの学生時代、神様を見失って苦しんでいたとき、わたしがそう問われたら、わたしは「あなたを求めています」と言った。迷いつつ、イエスを求めていた学生時代でした。

アンデレたちはイエスにそう尋ねられて、すぐに心の深みにあることを口にすることはできませんでした。それでこう言います。

「ラビ――“先生”という意味――どこに泊まっておられるのですか」

するとイエスは**「来なさい。そうすれば分かる」**と言われました。

イエスとともに一夜を過ごしたアンデレは確信しました。このイエスこそはメシア、世の救い主である、と。アンデレは、イエスの願い、祈り、決意、その愛、イエスの存在そのものを深く感じたに違いありません。それでアンデレは、兄弟のシモン・ペテロに会って言いました。

「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――に出会った。」ヨハネ 1:41

アンデレはシモンをイエスのところに連れて行きました。こうしてペテロはイエスの弟子となった。アンデレはペテロとイエスの仲介役となったのでした。ヨハネ福音書がアンデレについて語っている第１の話はこれです。

ヨハネ福音書がアンデレのことを伝える第２の話が第６章にあります。あるとき、イエスは山に登られました。たくさんの人々がイエスを慕って集まりました。イエスは人々の疲れと空腹を心配して、弟子のフィリポに「この人たちにパンを食べさ

せるにはどうしたらよいか」と尋ねられました。フィリポは、こんなに大勢だからとても無理だと言います。そのときアンデレがイエスに言いました。

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」ヨハネ 6:9

どうにもならないと思いつつも、今あるわずかなものをアンデレはイエスに伝えました。自分の持っているパンと魚を差し出した少年の優しさをアンデレは感じて、そうしたのでしょう。

その後、驚くべきことが起こりました。イエスはそれを大切に受け取って祝福の祈りをされた。そしてそれを分けられた。するとどうでしょう。大勢の人々が食べて満ち足りたというのです。少年の優しい思いを受けとめたアンデレの思いと言葉が、多くの人々の祝福につながった。人々を心配し大切に思われるイエスの思いと、優しい少年の心がつながって、多くの人々が喜びを共にした。その仲立ちをしたのがアンデレです。わたしたちも、誰かのささやかな提供を良いことのためにつなげたい、と願います。

アンデレに関するヨハネ福音書の第３の物語です。イエスの受難の時が迫りました。12 章です。イエスが生涯の最後を覚悟してエルサレムに入られたとき、何人かのギリシア人が尋ねて

きて、フィリポに「イエスにお目にかかりたい」と頼みました。フィリポはそれをアンデレに話し、アンデレとフィリポはイエスのところに行ってそれを伝えました。ここでもアンデレは、仲介役をしています。ギリシア人とイエスの間の仲介役です。イエスとギリシア人がどのように出会ってどんな話をしたかは書かれていません。しかしイエスがギリシア人が来たことを聞かれたとき、自分の死がいよいよ迫ったことを自覚してこう言われました。

「人の子が栄光を受ける時が来た。アーメン、アーメン、あなたがたに言う（ここはわたしの直訳です）**。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」ヨハネ 12:23-24**

イエスは一粒の麦として地に落ちて死なれる。けれどもそれで終わりではない。自分の死によって多くの人々の救いが実現する。（このイエスの言葉は50年前、聖職志願に向けて決定的にわたしを動かした言葉です。）

アンデレは続いてイエスがこう言われるのを聞きました。

「わたしに仕えようとする者は、わたしに従いなさい。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる」ヨハネ 12:23-26

イエスに呼ばれて従ったアンデレは、生涯、この言葉によって支えられていたに違いありません。

人の前に立って目だった働きをしたわけではないアンデレ。しかしアンデレはイエスと人々の仲介役を果たしました。イエスがそのような彼を大切に見守り、育んでおられました。そのような働きをする人こそ、今、必要とされています。

祈りましょう。

主イエスさま、あなたはわたしたちを大切な目的のために招かれました。わたしたちもまたあなたに従って歩み、ささやかではあっても神さまが喜ばれることの実現のために、人々の幸せのために働くことができますように。わたしたちを生かし用いてくださるあなたに感謝と賛美をささげます。アーメン